

新型『社会主義』の流行

——歴史と理論の超越の産物——

山 本 二 三 丸

目 次

1. 社会主義についての古典的規定（マルクス=エンゲルスの著作の中に示されているもの）
2. 「社会主義革命」勝利後の社会主義建設過程の諸問題（レーニンの著作の中に示されているもの）
3. 新型『社会主義』の代表作についての簡単な考察
 - イ) スターリンの世紀的創作にかかる ソ連『社会主義』
 - ロ) フルシチョフの構築予定の『共産主義社会』
 - ハ) 中国に現出した新改良型『社会主義』
- ニ) 最新式『社会主義』の模型の一例

——N前衛党の綱領に登場したもの——

1. 社会主義についての古典的規定

（マルクス=エンゲルスの著作の中に示されているもの）

社会主義社会とはどういう社会であるかということについて厳密な規定を示しているマルクスの文章をかかげる前に、その社会主義がどのようにして作りだされなければならないかということ、きわめて平易な文章で説明しているところの、マルクスの盟友エンゲルスの文章を紹介しておくのが適当と考えられるので、それをまずつぎに引用してかかげることにしよう。これは、マルクス主義文献のなかでとりわけもっともひろく読まれている彼の名著、『空想から科学への社会主義の発展』（1880年）のなかで、最後の、「三. プロレタリア革命」という言葉からはじまるところの、この著作の結びの一節となっているものである。

「プロレタリア革命——諸矛盾の解決。プロレタリアートは公的権力を掌握し、この行為によってブルジョアジーの手からすべりおちつつある社会的生産手段を公共の財産に転化する。この行為によってプロレタリアートは、生産手段を資本としてのこれまでの性質から解放し、生産手段の社会的性格に、自分を貫く完全な自由をあたえる。これからはあらかじめ決定された計画による社会的な生産が可能になる。生産の発展によって、いろいろな社会階級がこれ以上存続することは時代錯誤になる。社会的生産の無政府状態が消滅するにつれて、国家の政治

的権威もまたねむりこむ。人間は、ついに彼らの独自の社会化の仕方の主人になり、したがって同時に自然の主人に、自分たち自身の主人になる。——すなわち自由になる。

この世界解放の事業をなしとげることは、近代プロレタリアートの歴史的使命である。この事業の歴史的諸条件と、それとともにその本性そのものを究明し、こうして、行動の使命をおびた今日の被抑圧階級に、それ自身の行動の諸条件と本性とを自覚させることは、プロレタリア運動の理論的表現である科学的社会主義の任務である。]¹⁾

ごらんのように、ここには、社会主義社会をつくりあげるためのもっとも基本的な要件として、労働者階級による国家権力の掌握とこの権力による生産手段の社会的所有への転化が明示されているばかりでなく、さらにそこでは階級的区別がすべてなくなり、全住民が等しく労働者として社会的活動をしなければならないこと、そのために全社会的・計画的生産が実現されなければならないということが、明示されている。この後者の二つは、社会主義社会にとってもっとも重要な本質的存在条件であって、すぐつづいてつぎに挙げるマルクスによる社会主義社会の本質規定にかんする叙述を読むさいに、そしてまたそれにつづくさまざまな主張を読むさいにも、つねに念頭においておくことが肝要だと考えられるのである。

ところで、主題である社会主義社会について、そもそもそれはどういう社会であるのかという、その本質規定ともいうべきものはっきりとかかげているのは、ひとの知るように、マルクスの労作『ゴータ綱領批判』(1891年公刊)であって、これは、アイゼナッハ派とラサール派というドイツの二つの労働者党がゴータで合同党大会を開いてそこで採択された綱領——いわゆる「ゴータ綱領」——をとりあげて、その中に示されている数々の誤謬を暴露してこれに適切な批判を加えたものである。そこでは、たとえば、ラサールの「労働全収益権論」などの誤りが明示されているが、われわれにとってより重要なのは、この労作の中で、社会主義社会とそれよりさらに高度の共産主義社会とについてそれらがどういう本質をそなえた歴史的社會であるかということが明確に示されていることである。そこで、まずはじめに、社会主義社会の本質を明示している文章を引用してかかげることにしよう。(ただし、後段で参照の必要ある場合を考えて、各引用個所の頭に(a), (b)というように記号をつけておくことにした。)

(a)「生産手段の共有を土台とする協同組合的社會の内部では、生産者はその生産物を交換しない。同様にここでは、生産に支出された労働がその生産物の価値として、すなわちその生産物にそなわった物的特性として現われることもない。なぜなら、いまでは資本主義社会とは違って、個々の労働は、もはや間接にではなく直接に総労働の構成部分として存在しているからである」²⁾。

1) マルクス=エンゲルス全集、第19巻、228ページ、邦訳、国民文庫版(寺沢恒信・山本二三丸共訳)、115ページ、傍点—エンゲルス。

2) マルクス=エンゲルス全集、第19巻、19-20ページ、邦訳19ページ、傍点—マルクス、下線は山本がつけたもの。

なお、以上につづいて、次のパラグラフで、社会主義社会の重要な特質を解明している叙述が展開されているので、つぎに(b)として、その個所をあますことなく、引用してかかげておくことにしよう。

(b)「ここで問題にしているのは、それ自身の土台の上に発展した共産主義社会ではなくて、反対にいまようやく資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会である。したがって、この共産主義社会は、あらゆる点で、経済的にも道徳的にも精神的にも、その共産主義社会が生まれでてきた母胎たる旧社会の母斑をまだおびている。したがって、個々の生産者は、彼が社会にあたえたのと正確に同じだけのものを——控除をしたうえで——返してもらう。個々の生産者が社会にあたえたものは、彼の個人的労働量である。たとえば、社会的労働日は個人的労働時間の総和からなり、個々の生産者の個人的労働時間は、社会的労働日のうちの彼の給付部分、すなわち社会的労働日のうちの彼の持分である。個々の生産者はこれこれの労働（共同の^{フツンド}元本のための彼の労働分を控除したうえで）を給付したという証明書を社会から受け取り、この証明書をもって消費手段の社会的貯蔵のうちから等しい量の労働が費やされた消費手段を引きだす。個々の生産者は彼が一つのかたちで社会にあたえたのと同じ労働量を別のかたちで返してもらうのである」³⁾。

ここにかかげたマルクスの二つの叙述部分は、つとに有名なところで、下手な注釈を加えると、かえって正確な意味をそこなう恐れもあるかとおもわれるが、この拙論を読まれるさいに再度参照していただく必要もあるかと思われるので、以下、あえて簡単な説明をつけくわえておくことにしよう。（マルクスの原文は括弧をつけて示すことにし、適宜(1)、(2)というように番号をつけて説明を加えてゆくことにしよう）。

(1)「生産手段の共有を土台とする協同組合的社会」——これは、社会主義社会にとってもっとも根本的な生産関係を説明しているものである。たとえ一部分であろうと、その社会の中に生産手段を私的に所有する者が残っているかぎり、そのような社会は、とうてい社会主義社会の名に値するものではない。その社会にあるいっさいの生産手段が社会全体の所有するところとなり、労働力の担い手である社会の成員すべてが計画的にこれに結びつけられて労働するものでなければならない。そこには私的生産もなく、私的生産物もありえない。そこから当然につぎの法則が貫くことになる。すなわち、

(2) 労働生産物は商品ではまったくないし、労働生産物が私的に交換されることもない。労働生産物が価値などという奇妙なものをもつなどということはまったくなく、したがって貨幣などというものはひとかけらも存在しない。貨幣がまだ残っていて、それでなんでも手に入れることができるところには、社会主義のひとかけらもないのである。

つぎに(b)については、はじめにまずしっかりと頭の中に入れておかなければならないのは、

3) 前出、第19巻、20ページ、邦訳19-20ページ、傍点—マルクス、下線は山本がつけたもの。

この社会主義社会が「資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会」であるがゆえに当然にそれ以前の社会、つまり資本主義社会からの遺産をうけつがなければならないという、歴史的に必然的な制約が指摘されているということである。

(3)「この共産主義社会は、あらゆる点で、経済的にも道徳的にも精神的にも、その母胎である旧社会(=資本主義社会)の母斑をまだおびている。」(傍点—山本、括弧内は山本が付記したもの)。

この中で、まず「経済的」な「母斑」というのは、資本主義社会の生産力がどんなに高度に発展したとしても、労働することを拒否された産業予備軍はますます大量となっており、また旧来からの固定した不合理な社会的分業が支配している、等々の事情によって、労働の生産力は、すべての住民にたいして豊かな生活を保障してやることができるまでにはなっていない。そのように限られた労働の生産力というものをそのままうけついで「生まれたばかりの」社会主義社会では、各成員にたいしてその必要とする量を十分保証してやるほどの生産物が生産されえず、したがって、すぐ後で述べられているように、生産物の各成員への分配は、「必要に応じて」ではなく、「労働に応じて」ということにならざるをえない、というわけである。他の二つ、「道徳的、精神的」な面での「母斑」については、およそつぎのような内容が考えられる。資本主義社会では、人間は、なんのために働くかといえば、なによりもまず第一に、自分のため、自分の家族のためであり、他人のことはいっさいお構いなし、である。完全な自己中心主義、利己主義が支配している。さらに、自分の労働にたいして受けとる報酬については、「これだけ働いたのだからそれに見合うだけのものを受けとらなければ」というのが、資本主義社会では通例の観念である。「自分は10に値するだけ働いたが、8をもらうだけで結構だ」などという奇妙な「精神」状況の持主は一人もいないのである。

以上、三つの点は、いずれも旧社会である資本主義社会で支配的にまかりとおっていたもので、そこから「生まれたばかりの」社会主義社会は、必然的にその「母斑」をそのまま受けついで生産・分配を社会的に規制せざるをえないので、それが、「各成員は、その能力に応じて働き、その労働に応じて受けとる」という、まさしく社会主義社会にぴったり適応した基本原則を必然的に生み出すことになっているのである。この基本原則そのものは、一般によく知られているところであるが、その内容について立ち入った考察をし、そこにふくまれている事柄の重大さについて深く考えるということはあまりこころみられていないようであるので、さきに引用した(b)のなかから、重要な叙述部分を再度つぎにかかげてその中にふくまれている深い意義を明らかにすることにしよう。

(4)「個々の生産者は、これこれの労働(共同の^{ファンド}元本のための彼の労働分を控除したうえで)を給付したという証明書を社会から受け取り、この証明書をもって消費手段の社会的貯蔵のうちから等しい量の労働が費やされた消費手段を引きだす。」——ここに述べられている「労働に応じての分配」という言葉そのものはいたって簡単明瞭であるが、しかし、さてその

意味する内容は、といえば、簡単どころか、きわめて高度にして重大な問題がそこにふくまれていることをしかと読みとらなければならないのである。

だれでもよく知っているように、この資本主義社会では、各個人の労働はさまざま異なった具体的形態をとっており、さらに労働の強度も千差万別である。そのような具体的労働について、その形態を捨象して、すべてまったく等質の抽象的労働に還元してその労働量を計量するなどということが、いったい、どうやってできるであろうか？ 各成員の給付するそれぞれ異なった形態の具体的労働について、それらを等しい質の抽象的労働に還元してその労働量を——たとえば、〇〇時間というように——算定することが容易でない上に、さらに、それら成員に分配される消費手段について、その中にすでに対象化している労働量——さきの生きた具体的労働について算定されたものと同じ質のものとしての——をも算定しなければならないのであって、これはまたさらに至難である。このように、生きた具体的労働を等しい質の抽象的労働に還元して、さらにその労働量を正しく算定し、こうしてはじめて確定された労働量に応じて同じ労働量の対象化した生活物資が分配されるということが首尾よく実現するまでに、いったい、どれだけ長い時の流れと、その上にどれだけ高度に発展した科学とその技術的応用とがなければならないであろうか？ おそらく想像を絶するほどの長期にわたる歳月が必要と思われる。それゆえ、この「労働に応じての分配」ひとつを考えてみても、資本主義社会を変革して社会主義社会を首尾よくつくりあげるためには、たとえ重大な障害に阻まれることがないとしても、一世紀はおろか、2～3世紀に余るほどの歳月の経過が必要不可欠と考えられるのである。この場合、もっとも重要な問題は人間そのものにある。右の世紀的大事業を達成するのは、ほかならぬ社会を構成している生きた主体としての人間であり、人間の集団である。だが、右のような主体はひとりで生まれてくるものではない。われわれの眼の前にある資本主義社会では、生きて人間として意義のある仕事をなしとげるために食うのではない。まさに動物と同じく、餌を獲得せんがために、つまり食うために働く、いや働かなければならないのである。人間労働力を担って食うために働かなければならない勤労大衆が国民の大半を占め、ごく少数の大・中資本家階級の人間が賃銀奴隷大衆からできるかぎりの剰余価値＝利潤を搾りあげ、国家権力を操ってこの世の極楽ともいべき資本主義体制を強力的に維持し、まさに完璧な「経済的、道徳的、精神的」枠組みができあがっているこの現実の実態を冷静に観察するならば、どんなにすぐれた、そしてどんなに強力な前衛党組織がどんなに適切な指導を遂行しえたとしても、想像を絶するばかりの時間と、さらに果てしなく続く執拗にして頑強な反革命策動を弾圧するための組織と指導のための計り知れない労苦とが、必要となることであろうかと、むしろ危ぶまれるほどである。こうした、読者が当然抱くであろう危惧を予想したかのように、マルクスは、資本主義社会が変革されて社会主義社会に移行するさいの基本的で不可欠な要件を、つぎのように明示しているのである。

(c)「資本主義社会と共産主義社会とのあいだには、前者から後者への革命的転化の時期が

ある。この時期に照応してまた政治上の過渡期がある。この時期の国家は、プロレタリアートの革命的独裁以外のなにものでもない。⁴⁾」。

「プロレタリアートの革命的独裁」という言葉そのものは、えせ民主主義のぬるま湯の中で貨幣権力の支配に甘んじている人間にとっては、どうしても、なにか暴力的で無規律な強圧が支配しているような状態だと受けとられがちであるが、そうした無規律で暴力の支配するようなところに、汗を流して働く人々が主人公としてつくりあげる社会などとうてい出来っこないことは、落ち着いてよく考えれば容易にわかるはずである。それと同時に、貨幣と資本が強固に支配し、人間が食うために働かなければならない資本主義社会を変革するためには、その最初の段階において強力をもって資本の力を抑圧する独裁なくしてはとうてい不可能であるということも、理解できるはずである。しかし、この「独裁」という言葉の響きに気づかって、その内容を正しく理解することも、またそれを人々によく説明し納得させることも、まったくできないような、そしてなによりもおだやかに苦労なしに事を運ぶことしか考えないような、自称「前衛党」というものは、どうしてもこう説明して票集めにけんめいということにならざるをえないのである、——曰く、「われわれは、独裁などということは、絶対に認めません。すべて民主主義を守って平和に、仲よく事を運んで、働く者が幸せになる社会をつくります」。こういう諸君にとっては、マルクスの文句など、まさに「馬の耳に念仏」である。

ところで、さきに引用した(b)において見たように、マルクスは、共産主義社会という言葉は重ねてつかっているが、社会主義社会という言葉はつかっていない。しかし、今では「それ自身の土台の上に発展した」ものだけを共産主義社会とし、「資本主義から生まれたばかり」を社会主義社会とするのが通例となっており、私もその用法がより適当と考え、本稿では表題からはじまってそれにつづく論述はすべてそのように用いているのであるが、さて、その社会主義社会についてのマルクスの論述の大要は、以上の説明で一応こと足りるが、発展した共産主義社会についても、やはり、社会主義社会との関連を明らかにして、その本質的規定をとらえておかなければならない。マルクスは、当然のことながら、『ゴータ綱領批判』の中で、生まれたばかりの共産主義社会についての説明につづいて、右の発展の内容を説明しているので、これをつぎに引用してかかげておかなければならない。

(d)「共産主義社会のより高度の段階で、すなわち個人が分業に奴隷的に従属することがなくなり、それとともに精神労働と肉体労働との対立がなくなったのち、労働が単に生活のための手段であるだけでなく、労働そのものが第一の生命欲求となったのち、個人の全面的な発展にともなって、またその生産力も増大し、共同的富のあらゆる泉がいつそう豊かに湧きでるようになったのち、——そのときはじめてブルジョアの権利の狭い視界を完全に踏みこえることができ、社会はその旗の上にこう書くことができる——各人はその能力に応じて、

4) 前出、第19巻、28ページ、邦訳28-29ページ、傍点—マルクス。

各人にはその必要に応じて！』⁵⁾。

この旗の上に書かれるはずの簡単な言葉はまことにすばらしいもので、たいていのひとはこういう社会になったらなんと仕合わせな暮らしに恵まれることだろうと思ひ、はやくそういう世の中になってほしいと心待ちにのぞむことであろう。しかし、ここに述べられていることでもっとも肝心なのは、生活が豊かになるというところにあるのではまったくない。唯一最大の眼目は、物質的富の豊富さにあるのではなく、まさしく人間そのものの全面的発展、いふなれば、社会的人間としての完成そのものにあるのである。人間そのものの全面的発展がなければ、物質的富の豊富は問題にもなりえず、右のスローガンは空文句に終わるのである。かつて、生まれたばかりの、低い段階の共産主義社会において、必然的に母胎たる資本主義社会から受けつがざるをえなかつたおくれた、^{ゆが}歪められた、低い「経済的、道徳的、精神的」母斑をば、人間自身が一人残らずその体からすっかり清算して、まったく質の異なつたはるかに高度の資質を身につけ、これを全面的に遺憾なく発揮することができるようになったとき、はじめてそこに、動物世界に完全に別れをつけて真に人間社会の実をそなえた歴史的社会が、すなわち共産主義社会が実現することになるのである。

さて、マルクス=エンゲルスによつてはじめて科学的に与えられた社会主義社会についての古典的規定について、その内容のあらましを簡単ながら一応確認することができたものと考えられるので、これから目次にかかげた順序で考察を進めることにしよう。

2. 「社会主義革命」勝利後の社会主義建設過程の諸問題（レーニンの著作に示されているもの）

この節の表題に記されている「社会主義革命」勝利後というのは、いうまでもなく1917年10月レーニンの率いるボリシェヴィキの指導のもとに労働者・農民・兵士ソヴェトが勝利を収めたいわゆる「十月革命の勝利の後」ということであつて、けつして社会主義への変革が達成された後ということではない。この十月革命によつて国家権力を獲得したボリシェヴィキは大規模な生産手段（工場、鉱山、鉄道、船舶、銀行、等々）と土地の国有化を実施し、国名もソヴェト社会主義共和国と名づけたが、しかし、それは、レーニンが再三にわたつてきびしく戒めているように、ソヴェトが社会主義に成つたことを意味するものではなく、ただ社会主義へ向つて前進すべく奮闘する覚悟を示したものに過ぎず、実際にはその社会主義の入口よりはるか手前のところにとどまっていたのである。しかし、この実態を正確に認識していたのは、ほとんどレーニンひとりであつて、トロツキー、その他多くの指導者たちは、戦時共産主義政策の失敗にもかかわらず、さらに共産主義建設の推進を主張したものである。この時点で、レーニ

5) 前出、第19巻、21ページ、邦訳21ページ。

ンは、ロシアの現状の正確な把握にもとづいて、新経済政策（ネップ）への転換という路線をうちだしたのであって、それは、1921年3月ロシア共産党第10回大会で採択され実施されることになったのである。ロシアにおける社会主義建設過程の問題、というよりもむしろ、ロシアの現段階をどのように把握し、どのように理解すべきかという、もっとも決定的で緊切な問題にたいして、レーニンがあたえた解答が、彼の有名な論稿『食糧税について——新政策の意義とその諸条件』にほかならない。そこで、その中から当面の問題にたいする答えを提供していると考えられる、そのはじめの『ロシアの現在の経済について（1918年の小冊子から）』と題された一節から、関連するところを引用してかかげることにしよう。この一節は、右の「1918年の小冊子」という添え書きが明示しているように、その時点で発表されたレーニン自身の論稿『「左翼的」な見解と小ブルジョア性について』の中から彼自身が抜粋してかかげたものであるが、しかしそのレーニンによる再録にあたっては適宜加筆されている点があるということをつけくわえておこう。

「……………国家資本主義はわがソヴェト共和国の現状にくらべると、一步前進であろう。もし、およそ半年後に、わが国に国家資本主義がうちたてられるとしたら、それは大成功であり、一年後にわが国で社会主義が最終的に確立され不敗となるであろうということの、もっとも確実な保障となるであろう。

私はだれかが、けだかい怒りにもえて、この言葉に寄りつかなくなるのが想像できる。……なんだと？ ソヴェト社会主義共和国で、国家資本主義への移行が、一步前進であろうというのか？……………それは社会主義にたいする裏切りではないか？ と。

この点についてこそ、もっとくわしく論じなければならない。

第一に、社会主義ソヴェト共和国と名のる権利と根拠とをわれわれにあたえる、資本主義から社会主義へのこの移行とは、一体どんなものであるかを検討しなければならない。

第二に、わが国の社会主義のおもな敵としての小ブルジョア的な経済的諸条件と小ブルジョア的な自然発生性とを見ない人々の誤りを、暴露しなければならない。

第三に、ソヴェト国家が、ブルジョア国家とは経済的にちがっていることの意味を、よく理解しなければならない。

これらの三つの事情をみな研究してみよう。

ロシア経済の問題ととりくみながら、この経済の過渡的な性格を否定したような人は、まだなかったようである。どんな共産主義者も、『社会主義ソヴェト共和国』という表現が、社会主義への移行を実現しようというソヴェト権力の決意を意味するのであって、けっしていまの経済的秩序を社会主義的なものとみとめることを意味するのではないということも、ひとりとして否定しなかったようである。

だが、移行という言葉は、なにを意味しているか？ それは経済に適用する場合には、現在の体制のなかに、資本主義と社会主義との両方の諸要素、小部分、小片があるということ

を意味しないであろうか？ だれもがそのとおりとみとめている。しかし、これをみとめていても、ロシアに現存するいろいろな社会 = 経済制度の諸要素とは、いったい、どういうものであるか、ということについては、かならずしもだれもが深く考えているわけではない。だが、ここに問題の核心がある。

これらの要素を列挙してみよう。

- (一) 家父長制的な、すなわち、いちじるしい程度に現物的な農民経済、
- (二) 小商品経済（穀物売る農民の大多数はこれに入る）、
- (三) 私経営的資本主義、
- (四) 国家資本主義、
- (五) 社会主義。

ロシアは非常に大きく、また非常に多様性に富んでいるから、社会 = 経済制度のこれらすべての異なった型が、ロシアのなかでからみあっている。事態の特異性は、まさにこの点にある。

そこで問題になるのは、どの要素が優勢か、ということである。小農民的な国では、小ブルジョア的自然発生性が優勢である。また優勢にならざるを得ないのは明白である。農耕者の大多数、しかも圧倒的多数が、小商品生産者なのである。国家資本主義の外皮（穀物専売制、統制下にある企業家と商人、ブルジョア的な協同組合員）を、投機者が、ここかしこで破っており、投機のおもな対象は穀物である。

主要な闘争はまさにこの分野で展開されている。『国家資本主義』のような、経済学的範疇の用語で言えば、だれとだれとのあいだでこの闘争が、おこなわれているのか？ 私がいま列挙した順序の、第四と第五の段階のあいだであろうか？ もちろんそうではない。ここでは国家資本主義が社会主義と闘争しているのではなく、小ブルジョアジー・プラス・私経営的資本主義が、いっしょになり、国家資本主義とも、また社会主義とも闘争しているのである。小ブルジョアジーは、国家資本主義的なものであらうと、国家社会主義的なものであらうと、あらゆる国家的な干渉、記帳、統制に抵抗する。これはまったく争う余地のない現実の事実であって、これが理解できないところに、幾多の経済的な誤謬の根源がある。』⁶⁾

いささか長きに過ぎる引用であるが、ここに引用したレーニンの所論を味読することが大切であり、それによって、レーニンがどれだけ正確にマルクス主義理論を把握しており、しかも労働者・勤労農民の動向を的確にとらえ、これを正しく指導する能力をそなえた真実の指導者であったかということを理解することが必要でもある、と愚考する次第である。だが、われわれの当面する社会主義のとらえ方の問題にかんするかぎりでは、上のレーニンの所論は、やはり問題をふくんだものであって、このことは、さきにわれわれが確認したマルクス=エンゲル

6) 前出、第32巻、308-310ページ、邦訳355-357ページ、傍点—レーニン)。

スの与えている古典的規定の内容と読みくらべることによって、疑いもなく明瞭となるのである。つぎにその主な問題点を簡単に見てみることにするが、そのさい念頭においていなければならないのは、レーニンが挙げたロシアの社会＝経済制度の組合せである。レーニンは『食糧税について（新政策の意義とその諸条件）』の中で、

「ここにあげた、1918年の考察では、期間について幾多の誤りがある。期間はそのころ予想されていたよりは、長いことがわかった。それは驚くにはあたらない。しかし、わが経済の基本的な諸要素は依然として同じである。「貧」農（プロレタリアと半プロレタリア）は、非常に多くの場合、中農になった。そのために小ブルジョア的な「自然発生性」が強まった。しかし1918年—1920年の内戦は、国の荒廃を極度に強め、その生産力の復興をおくらせ、ほかならぬプロレタリアートをだれよりも衰弱させた。……」⁷⁾

と述べているが、さきにかかげた諸要素の組合せにはたいした変化はなかったと考えてよいであろう。

問題は、以上のような組合せという事態を前にして、同じ労作の中で、レーニン自身がつぎのように述べているところにある。

「食糧税は極度の窮乏と荒廃と戦争によってよぎなくされた独特の「戦時共産主義」から、正しい社会主義的な生産物交換へ移行する形態の一つである。ところが、この生産物交換は、それはそれで、住民のなかで小農層が優勢を占めていることから生ずるいろいろな特殊性をそなえた社会主義から共産主義へ移行する形態の一つである。……（中略）……小農民的な国で自分の独裁を実現しているプロレタリアートの正しい政策は、穀物と農民の必要とする工業製品との交換である。そのような食糧政策だけが、プロレタリアートの任務に必ずるものであり、それだけが、社会主義の基礎をかためることができ、社会主義の完全な勝利をもたらすことができるのである。」⁸⁾

レーニンは、この論稿の「結び」において、重ねて、

「食糧税は、戦時共産主義から正しい社会主義的な生産物交換への過渡である。

1920年の不作によって激化された極度の荒廃は、大工業を急速に復興することが不可能なために、この過渡を緊急に必要としている。

そこで、まず第一に、農民の状態を改善することである。その手段は食糧税であり、農業と工業との取引の発展であり、小工業の発展である。

取引は商業の自由であり、資本主義である。それは、小生産者の分散性とたたかう、またある程度までは官僚主義ともたたかうのを助ける度合に応じて、われわれにとって有利である。その度合をきめるのは、実践であり、経験である。プロレタリアートが、その手にかた

7) 前出、第32巻、319ページ、邦訳367ページ。

8) 前出、第32巻、321ページ、邦訳369-370ページ傍点と下線—山本。

く権力を握っており、運輸と大工業とをその手にかたく握っているかぎり、その点でプロレタリア権力にとって恐ろしいものは、なにもない。』⁹⁾

と述べて、重ねて、「社会主義的な生産物交換への過渡」ということを強調している。だが、「社会主義的な生産物交換」とは、いったい、どういうものであろうか？

1917年10月革命によって国家権力を掌握したボリシェヴィキ＝共産党を中心とするソヴェト政府は、大規模な生産手段と土地との私的所有を廃棄し、これらすべてを社会的所有に移し、社会主義への移行のための一つの重要な条件を達成したものである。これは社会主義建設のためのもっとも主要な要件ではあるが、そのこと自体は社会主義を意味するものではない。ところが、レーニンのかかげる国内の経済制度5種類のうち、はじめの三つは、資本主義的なもの、または資本主義以前のものばかりである。ことに最初に挙げられている「家父長制的な、著しい程度に現物的な農民経済」のごときは、そこで恐らく数世紀余にわたって支配してきた古臭い、前期的な風俗、習慣、思考様式がそのまま強固に温存されているはずであり、二番目の小商品生産者層とならんで、どちらも簡単に社会主義的組織に組み入れられるようなものではまったくない。にもかかわらず、「社会主義的な生産物交換」という言葉があてはまるような状況が生まれる、とレーニンは述べている。

そもそも、「生産物交換」をもって「社会主義的」と規定すること自体、問題である。社会主義社会には、商品もなく貨幣もなく、生産物の交換などということは、葉にしたくとも見られないはずである。さらに立ち入って言うならば、レーニンがかかげた五つの経済組織が存在している社会は、たとえその一部が大規模生産手段を労働者が運営するところの、レーニンのいわゆる「社会主義」的組織^{ウクライナ}であろうと、それは、部分であって、社会全体としては、まだほんの手はじめの、社会主義に向ってやっと一歩を踏みだしたばかりの、初期の過渡期社会にはほかならない。もしかしてプロレタリア国家権力にひびがはいるならば、それだけで、後れた資本主義社会にあと戻りするのは必定である。おそらくレーニンは、ソヴェト権力を確立し、主要な生産手段を社会的所有に移し、さきに彼自身が挙げた五つの制度のうちの「国家資本主義」と「社会主義」とを強化・拡充することによって、社会主義の入口に間もなく到達できるものと考えていたと、推察されるのであるが、惜しくも1924年1月、わずか54歳をもってこの世を去り、そのために精魂を傾けて奮闘してきた社会主義社会への接近は、ついに実現されえなかったのである。

ところが、である。ソヴェト・ロシアは、まるでレーニンの逝去を待っていたかのごとく、間髪を入れず、レーニンの後継者を、そのレーニンをはるかに超絶する指導者、「真実」の頭領ともいべき人物を生み出したのである。それは、レーニンなど及びもつかない数々の「偉業」をなしとげ、「史上に不朽の名をとどめている」かの書記長、スターリンそのひとである。

9) 前出、第32巻、342-343ページ、邦訳393-394ページ。

3. 新型『社会主義』の代表作についての簡単な考察

イ) スターリンの世紀的創作にかかるソ連『社会主義』

レーニンが逝去するや、間髪を入れず、そのあとをおそってソ連共産党の最高指導者＝書記長の地位を占めたのは、かねてからその名をとどろかしていたスターリンそのひとである。彼は、理論の面でも実践の面でも、ずばぬけてすぐれた「真実」の頭目であったのであって、そのことは後段でつぶさに確証される場所であるが、ここでは、その前に、彼が、真に驚嘆に値するほどの「謙譲の美德」の持主であったという、まったく世に知られていない一面をぜひとも明らかにし、強調しておかなければならない。1924年1月にレーニンが逝ってからわずか3カ月たった4月初めに、彼は、「レーニン主義の基礎」と題する講演をおこない、ついでただちにこれを著書の形にして、ソ連国内はもとより世界中にひろくばらまいたものである。だが、彼の驚くべき「謙譲の美德」が「レーニン主義」という文字に示されていることを正しく理解しえたひとはいきわめてすくないであろう。彼は、この講演と著作の中で、マルクスやレーニンの説いた時代もののみきまりきった理論などとは隔絶した斬新にしてはるかに水準の高い、スターリン自身の開発した諸「理論」をはじめて展開してみせたのであって、本来ならば、「スターリン主義の基礎」と銘うって大々的にひろめるべきところであったのである。なぜなら、その内容は、レーニンの説いた理論などとはさらさら関係のないものであって、「レーニン主義」などというものは、この世には存在しない、名前だけのものであるからである。それをあたかもこの世に実在しているかのように、「レーニン主義」というありもしないものの名称だけをつくりだし、これでレーニンの名をいっそう高めると同時に、自分の開発した世紀的「理論」を「レーニン主義」の名称で世界中にひろめるといふ、凡人などには想像もつかないほどの深慮遠謀がそこにあるのである。それと同時にこれによってレーニンそのひとの功績を不朽のものとしてたたえるという、まさに万人をして感動せしめずにはおかない「謙譲の美德」の発揚がひろくみとめられることにもなっているのである。

「謙虚」にもスターリン主義と名乗ることを控えて、レーニンの顔を立てて、「レーニン主義」と銘打って宣布した書記長スターリンが、世界史上はじめて創造した『社会主義』とは、どのようなものであるかということが、当然にわれわれの最大関心事とならずにはいないのであるが、そのソ連『社会主義』についての彼の教示を仰ぐ前に、世界史上初めて『社会主義』社会を築きあげるといふ世紀的快挙を首尾よくなしとげた偉大な書記長が、どんなにマルクス・レーニンを超越した高度の「理論」を体得していたかということを見てもおく必要がある。というのは、彼の創造した最高度の「理論」にもとづいて、はじめて『社会主義』を首尾よくこの地球上に建設しえたものと考えなければならないからである。彼の「理論」水準の超高度ぶりを実証している論稿として、われわれは——紙幅の制限を考慮して——つぎの二つだ

けについて、その聞かせどころともいべきところを抜粋して示すことにしよう。そのひとつは、1938年に発行された新版『ソ連共産党（ボ）歴史小教程』の中に特別にスターリン自身が書き加えることを命じた「弁証法的唯物論と史的唯物論」と題された一節であり、いまひとつは、世界中のほとんどすべての共産党・労働者党が心底から感激し感動し献身的に奉持し、かつぎまわったいわゆる『スターリン論文』、正確には『ソ連邦における社会主義の経済的諸問題』（1952年）である。ただし、後者は、この傑出した書記長の指導によってロシアに『社会主義』が建設されおわたったところでの「経済的諸問題」が中心となっているもので、したがって、この世紀的なソ連『社会主義』の画期的内容と緊密に結びついているので、これについてはソ連『社会主義』そのものの画期的意義とあわせて同時に——後段で——学びとることが適当なのである。

まずは、『歴史小教程』の中の上記の節の内容がいかにマルクス・レーニンの古臭い低水準を抜いてはるかに「高い」水準のものであるかということを確認すれば事足りると思われるので、その中の「(三) 史的唯物論」と題された小節のうちからもっとも「すぐれた」論説を二つだけ抜粋してかかげておくことにしよう。

「物質的財貨の生産に使われる生産用具および一定の生産上の経験と労働の熟練をもって
 いることにより、生産用具を使って、物質的財貨を生産する人間——これらの要素が結合し
 て、社会の生産力を形成する。

しかしながら、生産力は、生産の一つの面、物質的財貨の生産に利用される自然物や自然力と人間との関係をあらわす生産様式の一つの面にすぎない。生産のもう一つの面、生産様式のもう一つの面は、生産過程における人と人との相互の関係、すなわち人間の生産関係である」¹⁰⁾。

ついでながら、スターリンの超マルクスの論究による「史的唯物論」なるものの説明は、もっぱら「生産」という言葉を柱として展開されているもので、ここから、生産力と生産関係についての超マルクスの把握がはじまることになっているのである。この卓越した書記長の「学術的」用語の配置そのものが、すでに、マルクスの平凡な水準をはるかに超越した画期的なものである。まず、「生産上の経験」と「労働の熟練」とはきちんと区別すべきものとされる。さらに、マルクスの主張などを簡単に一蹴しているのは、「生産用具と人間」という「要素の結合」が、「社会の生産力」であるという、まさに画期的な主張である。マルクスが人間を主体として、その人間の労働の生産力に眼目をおいているのは、スターリンの眼からみれば、まさに笑うべき見戯なのである。「生産様式」という概念についても、それは「自然物や自然力と人間との関係」をあらわすと同時に、それはまた、「生産過程における人と人との相互関係＝

10) 『ソ連共産党（ボリシェヴィキ）歴史小教程』、東方書店出版部訳、196ページ、傍点一原著者のもの。

生産関係」をもあらわすものだという、これまた画期的概念規定の連続である。生産過程というのは、人間がその労働力を支出し、労働手段を用い自然力を利用して労働対象の形態変化を生み出す過程であって、そこには「人と人との相互関係」などというものはまったくありえないし、そこには「生産関係」など存在しようもないというのが、マルクスの基本的、というよりも初歩的概念規定であるが、そうした概念規定など古臭くてとうの昔に無用のものとして片づけられているという、最新にして最高の断定がわが書記長によって下されているのであって、こうしたことが飲みこめない者は永久に救われないのである！

さらに、上の論述より一段とめざましくマルクスの古臭い史的唯物論を「超克」してやまない画期的主張を引用しなければならない。

「生産の第二の特徴は、生産の変化と発展とが、いつのばあいもまず生産力の変化と発展とをもって、なによりもまず生産用具の変化と発展から始まることにある。したがって、生産力は、生産のもっとも活動的なもっとも革命的な要素である。はじめに、社会の生産力が変化し、発展して、そのあとに、これらの変化に依存し、これらの変化に照応して、人間の生産関係、経済関係にも変化がおこる。しかし、このことは、生産関係が生産力の発展に影響をあたえず、生産力が生産関係に依存しないということの意味するものではない。生産関係は、生産力の発展に依存して発展しながら同時にまた逆に生産力の発展に作用して、その発展をはやめたりおくらせたりする」¹¹⁾。

マルクスやレーニンが相変わらずそれにしがみついている「生産力と生産関係との対応・矛盾」の法則などはもうとっくに通用しないのである。いまや、生産力と生産関係とは、まるで二人三脚さながらに、けっして対立や矛盾などせず、仲よく結びつき、依存しあって、ともども手をたずさえて変化し発展するものとなったのである！

さて、以上の簡単な考察によって、この書記長スターリンがいかに傑出した「理論」の創造者であり、マルクスやレーニンをはるか超越する真実の「革命的理論家」であるかということはいくぶんよく理解されたと思うので、つぎに、この書記長が、これまたいかにマルクス・レーニンを超克してやまない超弩級の「革命的実践家」であるかということが検証されなければならない。だが、それにはこみいった手数はいらぬ。たった二つ、つまり、彼スターリンによるソヴェト『社会主義社会』建設の「偉業」と、この完成したソ連『社会主義』の経済的問題を論じた前記のスターリンの著作のあらすじを知れば、もうそれで十二分なのである。

スターリンが、レーニンのあとを襲ってソヴェト連邦の最高指導者となってからわずか12年の歳月が経過しただけで、彼は、たちまちにして、ソ連邦に『社会主義』をうち建てるといって、空前の世紀的大偉業をはたしたのである。1936年11月、第八回全ソヴェト連邦ソヴェト大会において、スターリンは『ソ連邦憲法草案について』と題する演説をおこない、その中で、ソ連

11) 前出、199ページ、傍点—スターリンのもの。

は、いまや社会主義的労働者階級、社会主義的農民階級および社会主義的インテリゲンツィア階級からなる社会主義社会に成った、との宣言を発表したのである。

マルクス=エンゲルスによれば、それに到達するには、おそらく2～3世紀は要するであろうと考えられ、またレーニンがつねづね、まだその入口にも到達していないと明言していた『社会主義』社会である。ところが、なんと驚いたことに、ヨーロッパで札つきのもっともおくれた未開・野蛮国との定評をいただいていたそのロシアの土地に、農奴制廃止後わずか75年、10月革命後20年足らずで、資本主義社会をはるかに越えた『社会主義社会』が築きあげられてしまったのである。なんとという世界史的大偉業であろうか！ このスターリンの実践的能力のなんと超人的・驚異的であることよ！ 全世界の共産党・労働者党の指導者たちが、一人残らず、平党员にいたるまで、歓呼してこれを迎え、書記長の世紀的偉業を絶賛し、ソ連『社会主義』と共産主義党の宣伝に全精魂を傾けて奮闘したのは、まことにさもあるべきことであったのである。

では、偉大な書記長スターリンは、マルクス・レーニンの確固たる主張など歯牙にもかけず、これらは一つ残らず反故にして、右のような奇蹟的大偉業をば、いったい、どのようにして成しとげたものであろうか？ それこそ、まさしく、彼独自の超絶的理論的能力と徹底した超人的実践能力の十全の発揮によるものでなくてなんであろうか！

まず、理論的能力についていえば、社会主義社会には商品もなく貨幣もないという『ゴータ綱領批判』の中のマルクスの主張など、きわめて幼稚で小児病的妄想の産物にすぎない。物やカネなどは問題ではない。人間こそ唯一の肝心なものである。人間さえ、人間が一人残らず、社会主義的人間に成ることこそ肝心であり、それによってこそ社会主義社会は簡単にできるのである。ソ連邦には、労働者階級、農民階級、知識階級という三つの階級があるが、その間に階級対立はまったくなく、いずれも「社会主義的」という規定が申し分なくあてはまる性格のものであり、まことにみごとな協力関係を結んでいるのである。このような社会を真実の協同組合的社会と呼ばずして、なんと叫ぶのであろうか！

ソヴェト・ロシアの労働者階級も農民階級も、インテリゲンツィア階級も、私的個人的利益など念頭になく、一身を犠牲にして、ソヴェト社会のために奮闘しているのである。労働者は先進資本主義国の労働者のそれとは比べものにならないほどの高い熟練と強度をもって長時間、低賃銀に甘んじて労働しており、農民はまたこぞってコルホーズやソフォーズに加入して、ソヴェト社会のために献身的に労働しており、インテリゲンツィアはすべてソヴェト社会の人々の向上・発展のためにそれぞれの分野でそれこそ献身的に奮闘しつづけているのである。これらすべてを「社会主義的」階級を呼ばないで、なんと呼ぶことができるであろうか！ これらの階級すべてが「社会主義的」という、まったく新しい、美事な性格のものに完全に生まれかわったのは、ひとえに書記長スターリンの適切この上ない強力にして徹底的な指導によるものなのである。

労働者階級は、「スタハノフ運動」とか「社会主義競争」とかいう美事な名目のもとに、先進資本主義諸国の労働者など足許にも及ばないような高い強度と長時間の労働に耐えるべく訓練され、社会主義的精神に欠けてノルマを達成しえない労働者はただちに減給、罰金から解雇、収容所送りまで、その対応策が完備しており、また農民階級にたいしてはコルホーズできわめてきびしいノルマと低賃銀にたえる訓練が励行され、コルホーズへの加入を拒んだりノルマを達成しえない農民は、すべての富農と一部の中農と合せて、家族もろとも収容所に送って、適切な訓練を施すという、前代未聞の方法がとられる。

こうして、労働者階級と農民階級とは、収容所送りまでふくめて比較的容易かつ短時日の間にそれらの「社会主義化」は達成されえたのであるが、インテリゲンツィアについては、その頭の中の「社会主義化」、つまり「洗脳」はそれほど簡単・容易ではない。とりわけ、ソ連共産党内で、スターリンよりはるかにすぐれたマルクス主義理論家、指導的人間は、スターリンの反マルクスの理論とも、その強圧的指導方針とも相容れず、つねに眼の上たんこぶ的存在である。これらのすぐれた人望ある指導者は、スターリンの得意とする強力的方法で掃きなければならない。そこで、広範に用いられたのは、のちにフルシチョフ第一書記によっていみじくも「殺人鬼」と呼ばれたほどの残忍で悪辣きわまりない方法である。スターリンは、まず、党内でもっともすぐれた人望ある傑出した指導者、キーロフをば「手の者」を使って暗殺しておき、ついで「キーロフ暗殺」に加わったという罪名をおしつけて己れに尻尾をふらないすぐれた指導的黨員をつぎつぎと捕えて、処刑したのである。狡智に長けたこの頭目はさまざまな罪名をつけてブハーリンやその他数えきれないほど多くの黨員をことごとく処刑したのである。これが「社会主義的インテリゲンツィア階級」のスターリン式製造方法である。

だが、このスターリン式「社会主義化」方法は、ソ連国内で広く適用されただけでなく、ヨーロッパ全域にわたって適用され、数百万に上る犠牲者を生みだしたものである。

「レーニン主義」の頭目スターリンは、なんとナチズムの頭目ヒトラーと仲よく密約を結んでポーランド分割をすすめる、さらにバルト3国からはじまって、フィンランド、ルーマニア、チェコ、ブルガリアといった東南欧諸国をその支配下においたが、ヒトラーの歓心を買うために西部国境の軍備を大幅に後退させたところを、ナチス精鋭部隊の急進撃を食らって、モスクワ周辺まで占領され、ソヴェト人民数百万の犠牲によってようやくこれを撃退できたのであるが、なんと図々しくもこの対独勝利は頭目自身の指揮によるものだとして、ひとり大元帥の栄誉に輝いたものである。が、なんと、また万国の共産党・労働者党はみな歓呼してこの大元帥の「功績」を熱烈に讃え、かつぎまわったのである。ナチス降伏後、東南欧諸国の領土の相当面積をソ連『社会主義』国に併合し、またバルト三国などは完全な「ロシア化」を強引におしすすめたりして、資本主義的帝国主義諸国顔負けの併合・抑圧政策を大々的におしすすめたのは、さすが「レーニン主義」の最高指導者、民族問題の随一の最高権威として全世界の共産党から崇拜・追隨の的となった書記長の名を一段と輝やかしいものにした「壮挙」であったの

である！

このようにして、まさにヒトラーなど比べものにならず、チンギスカンの向うをはるほどの、大ソヴェト帝国をうち建てた歴史的英雄、大元帥にして「レーニン主義」最高峯のスターリンが1952年に発表した大著述が、『ソ連邦における社会主義の経済的諸問題』である。この大著述をば、全世界の共産党・労働者党が、歓呼の声をあげてもてはやし、絶讃し、けんめいにかつぎまわり、宣伝に力のかぎりをつくさないでいられようか！ この至上にして最高の「レーニン主義」者スターリンは、謙虚にも「レーニン主義」の題目だけは大声で唱えているが、この最高傑作の著書の中では、マルクス・レーニンが述べていたことはひとつ残らず超越して、はるかに高度の「経済理論」を教えさとしてしているのである。たとえば、さきに見たように「社会主義社会には、商品も貨幣もない」とマルクスが述べているのは、まったくの錯誤、笑うべき先入主なのである。商品や貨幣がりっぱにあるのが本当の社会主義社会である。そして価値法則も、資本主義などちがってりっぱに利用するのが社会主義社会なのである。では、資本主義社会と社会主義社会との間で、肝心の基本的な経済法則には、どんなちがいがあるというのか？——これに答えるのが偉大な最高指導者スターリンである。

まず「現代資本主義の基本的な経済法則」は、「その国の住民の大部分を搾取し、零落させ、貧困化させることによって、他の諸国とくに後進諸国の人民を債務奴隷化し、系統的に強奪することによって、最後には、最高の利潤を確保するために利用される戦争と国民経済の軍事化とによって、最大限の資本主義的利潤を確保すること」である。これにひきかえ、わがスターリンの率いる『社会主義国』では、その「基本的経済法則の本質的な諸特徴と諸要求」とは、おおよそつぎのように定式化することができるとされる。——曰く、「社会全体のたえず増進してゆく物質のおよび文化的な諸欲望を、高度の技術に立脚する社会主義的生産のたえまない増進と改善とによって最大限にみたすように保障すること」である。

「現代資本主義」についてはその「基本的経済法則」が問題とされていて、現在現実貫いている法則が問題だとされているが、肝心の『社会主義』については、「経済法則」そのものは姿を消して、「経済法則」の「本質的な諸特徴と諸要求」だけが問題として説明されている。「要求」というのは、いま実行されていないことの要求であるし、「特徴」というのは、そういう特徴をもっている法則だということであって、それはいま現に実現しているとは限らない、いや実現していなくて、これからのことであっても一向にさしつかえない。この辺の用語法は、まことに超マルクス・レーニンの的で、さすが、これら両名を抜いてはるかに高いところで「レーニン主義」を告示する指導者にしてこの言あり、と感心せざるをえないところである。これに加えて、ソ連『社会主義』はこれからますます発展して勤労大衆はますます豊かになってゆくのに反して、資本主義諸国はこれから生産は行きつまり没落への傾向をはやめるはずである、といったご託宣を聞かされれば、万国の共産党・労働者党の全党員のみならず、一般勤労大衆まで、スターリン書記長の超人的指導の有難さに打たれて、しばし発すべき言葉すらわからな

なくなってしまうはずである。偉大な救世主、超人的な大元帥スターリン！ 彼への讃歌がしばし地球をかけめぐったとて、なんの不思議があろうか！

だが、歴史の歩みは、なんと冷酷であり、皮肉そのものであることか、右のスターリンの超レーニンの御託宣も、いや、ソ連『社会主義』そのものも、そして全世界の共産党・労働者党挙げての全地域を包んで鳴りわたった「スターリン論文」讃歌も、スターリン奉讃の歓声も、わずか40年足らずで、はかない夢と消えて跡形もないとは！ こうして新型『社会主義』第1号は、つぎの第2号へとその席をゆずることになったという次第なのである。

ロ) フルシチョフの構築予定の『共産主義社会』

スターリンの強烈な粛清の嵐の中で、たくみにその信頼を勝ち取って、ソ連共産党の最高幹部、政治局員に成り上がったフルシチョフは、そのスターリンにたいして「殺人鬼」ときめつけたばかりでなく、彼が第一書記として開いた1961年のソ連共産党第22回大会での報告の中では、スターリンの名もスターリン憲法もことごとく抹殺されてしまったのである。この第22回大会報告で、フルシチョフは、「マルクス・レーニン主義」という言葉はさかんにふりまわすが、この言葉の発明者スターリンの名はついにいじまじまいという有様で、彼のスターリンへの怨恨がいかに深刻なものであったかがよくわかるのである。

ところで、この第22回大会は、フルシチョフの主導のもとに新しい綱領を採択したことで有名であるが、その綱領の作者であるフルシチョフが、綱領の趣旨説明の演説において並べたてている自画自讃のほどを、まずとくと鑑賞していただきたい¹²⁾。

「草案の全精神、すべての内容は、マルクス・レーニン主義理論と共産主義建設の実践との統一、その切っても切れない関連性を反映している。綱領には、工業、農業、国家の発展、科学、文化の部面や、また共産主義的教育の部面における課題が具体的にきめられている。

…………… (中略) ……………

…………… (中略) ……………

新綱領は、『すべてを人間のために、人間の幸福のために』という党のスローガンを完全に体現している。この綱領では、国民の物質的福祉と文化をいっそう高める問題、人間の個性を开花させる問題が、もっとも重視されている。そしてこれはきわめて合法的なことである。……………」¹³⁾

つづいて、フルシチョフ新頭目とその構築をめざしている当の『共産主義社会』がどんなにすばらしいものであるかが得々としてつぎのように弁じられていっているのである。

「綱領草案には、共産主義について、つぎのような規定があたえられている。

12) 以下にかかげる引用は、すべて、フルシチョフ『ソ連共産党の新綱領について』、ロシア語版、モスクワ、1962年刊行によるものである。

13) 前出、148ページ。

『共産主義とは、生産手段が単一の全人民的所有になっており、社会の全成員が完全に社会的に平等であるような、階級のない社会制度のことである。そこでは、人間の全面的な発展にともなう、生産力もまた、不断に進歩する科学と技術にもとづいて発展し、社会の富のすべての源泉が満々とした流れとなってあふれだし、「各人は能力に応じて働き、欲望に応じて受けとる」という、偉大な原則が実現される。共産主義とは、自由な自覚した勤労者の高度に組織された社会であって、そこでは社会的自治が根をおろし、社会の幸福のための労働が、万人にとって第一の生活欲求、自覚された必要となり、各人の能力は、国民に最大の利益をもたらすように用いられる』¹⁴⁾。

ごらんのように、フルシチョフがわずか20年後にソ連邦の地に築きあげると広告している『共産主義社会』は、「殺人鬼」スターリンが——収容所を満ばいにして——やっところしえあげた『社会主義社会』など比べものにならないほどずっと高度の『共産主義社会』であり、マルクスが『ゴータ綱領批判』のなかで「各人はその能力に応じて、各人はその必要に応じて」と規定した共産主義社会よりずっと高い「各人はその欲望に応じて受けとれる」という、まるで夢みるような真実のパラダイスなのである。このパラダイスをわずか20年でつくりあげるとは、なんと前代未聞の偉大なる指導者、世紀的救世主であることよ！ 全世界の共産党・労働者党のほとんどすべての指導者が歓呼してこれを迎え、絶讃し、誇らしげに宣伝してまわったのは、しごく当然のことである。この永遠に記念されるべきソ連共産党第22回大会に出席し、新教祖フルシチョフに手のちぎれんばかりの拍手を送り、歓呼してその「新綱領草案」を迎えた指導者層の中でひときわ声高く新路線への忠誠を表明したのは、誰あろう、日本共産党の輝ける指導者、野坂参三、袴田里見、榊利夫の三氏である。

まず「日本共産党中央委員会理論政治誌」と銘うたれた雑誌『前衛』第191号（1961年2月号）の巻頭に、『ソ連邦共産党第二回大会への日本共産党中央委員会の祝辞』がかかげられ、この新綱領が「全世界の人民に大きなはげましをあたえる」ことを保証し、今後も「フルシチョフ同志を先頭とするソ連共産党指導部の方針に忠実にそって」ゆくものであることが強調されたのである。

右の大会に出席して親しくフルシチョフの報告をきき、共産主義建設の新綱領のすばらしさに感激おくとあわず、帰国するやただちにフルシチョフ個人を絶讃し、新綱領の絶大な意義を強調する論説を発表したのは、袴田里見、榊利夫の両氏である。袴田氏は、『前衛』第191号)に『壮大な共産主義建設の綱領』と題する論文を載せるにとどまったが、榊氏は、さすが理論をとりしきる「理論委員長」の貫禄をみせて、矢つぎばやに二つの論稿を発表したものである。そのひとつは、雑誌『ナウカの窓』（1961年11月号）誌上に発表された『人類の夢を実現する新綱領——ソ連共産党第二回大会から』と題する報告論文であり、いまひとつは『前衛』

14) 前出、164-165ページ。

(第192号, 1962年1月)に発表された『共産主義の壮大な展望 ソ連第二二回大会と新綱領に見る』と題する論文である。これらの論説のどちらもが、フルシチョフにたいする絶讃と新綱領の絶大な意義の称揚にあてられたものであることは、それらの題名を見ただけですぐそれとわかるようなものであるが、なおその中味がどれほど熱のこもったものであるか、理論委員長の筆さばきのほどをとっくりと賞味していただくために、本文の文章そのものではなく、それぞれの節のはじめに大書して示されている見出しだけを並べてご覧に入れることにしよう。

まず『ナウカの窓』掲載の論文の見出し。——「胸をふくらませて待ったもの」,「社会主義の力と平和政策」,「空想——科学——現実」,「すごい工農業の発展テンポ」,「タダのものがふえていく」,「将来は社会的自治に」。

つぎに『前衛』(第192号)掲載の論文の見出し。——「共産主義建設の綱領」,「あふれるような工農業生産物」,「展望に挑戦する国外反動勢力」,「所得は三倍半,税金は全廃」,「高まる福祉,無料使用の分野がひろまる」,「働くことが切実な要求に」,「社会主義的民主主義の発揚」,「マルクス・レーニン主義に導かれて」。

ところが、歴史はまことに冷厳無常で、スターリン書記長の発明したかの「マルクス・レーニン主義に導かれ」たソ連の『社会主義』もフルシチョフの『共産主義』も藻屑と消え失せてしまい、いまやわれわれの目の前にあるのは、おくれた、資本主義まがいの社会だけとなっているのである。こうして、ソヴェト・ロシアによって開発された新型『社会主義』は、いずれもみごとに消え去ってしまったのである。

それにしても、「なんでも物がタダになる」ようなエセ共産主義社会になるという、この大ボラがよくもまあ、まかりとおったものである、と、感心させられるのは、私ひとりではないであろう。

フルシチョフ教祖の敗退・没落という事態にたいして、これまでこの教祖を献身的に絶讃し、その偉大さの宣伝にけんめいであった「共産主義者」のとった策略は、まことに教訓的というほかないものである。『前衛』第230号(1965年1月号)には、早速『フルシチョフ礼讃論のゆくえ』と題する座談会の記事が載せられたが、その座談会の中で、口をきわめてフルシチョフ教祖の修正主義を批判し、いかにこれまでこの教祖の修正主義と効果的に(!?)たたかってきたかということを一ばん多く、熱心に並べたてているのは、さすがに理論委員長の地位にあるわが榊利夫氏そのひとのなのである。自己批判など「どこ吹く風」でおしまい、というわけなのである。

ハ) 中国に現出した新改良型『社会主義』

現在の中国は、中国自身の説明によれば、「社会主義」であるとされている。もちろん、それは、マルクスが正確に規定したところの、資本主義の段階を経て、資本主義をいわば揚棄してその上につくりあげられた、より高度の歴史的な社会としての社会主義ではありえない。経済的には、それは、発展した資本主義諸国に比べて、はるかに低い段階にとどまっているが、しかし、資本主義という規定は簡単にはあてはまらない。これまで、主要な大規模生産手段——

大工場、銀行、鉱山、鉄道、船舶等々——は、すべて国有化され、「社会主義的」企業となっている。ちょっと見ると、中国全体の経済体制は、かつてレーニンが1918年代に特徴づけたロシアのそれによく似ている。レーニンが、ロシアの経済はつぎの五つの要素から成っていると述べたことは、本論稿でもさきに「2」において指摘されたが、念のため、もう一度ここにかかげて、よく見ることにしよう。それは、つぎのとおりである。

- 「(1) 家父長制的な、すなわちいちじるしい程度に現物的な農民経済、
- (2) 小商品生産（穀物を売る農民の大多数はこれに入る）、
- (3) 私経営的資本主義、
- (4) 国家資本主義、
- (5) 社会主義。」

レーニンは「どの要素が優勢か？」という問題をかかげ、これにたいして、次のように答えている。「小農民的な国では、小ブルジョア的な自然発生性が優勢であり、また優勢にならざるをえないのは明白である。耕作者の大多数、しかも圧倒的多数が、小商品生産者なのである。国家資本主義の外皮（穀物専売制、統制下にある企業家と商人、ブルジョア的な協同組合員）を、投機者が、ここかしこで被っており、投機のおもな対象は穀物である」¹⁵⁾。

では、中国の事情はどうかといえば、レーニンがかかげた五つの要素は、それらの間の比重については、かつてのロシアのそれと、かなり似ていると見てよいであろう。だが、肝心の当面する問題は、根本的に異なっているのである。レーニンにあつては、穀物の調達をスムーズにし、投機師の妨害を排除することが緊急の課題であった。だが、現在の中国にとっては、工業、農業をはじめとして全般的に生産力を高め、先進資本主義国に追いつくことが、当面の最重要課題である。そのために考えだして実施されたのがいわゆる「経済特区」であり、また先進資本主義国からの外資導入である。中国自身は、もちろん、資本主義社会ではなく、社会主義制度の上に立つ社会と称している。これについて、きわめて特徴的であり、教訓的でもあるのは、中国自身がさかんにもてはやしている「社会主義市場経済」という用語である。この言葉ほど、理論的にみてでたらめな、矛盾だらけの言葉はない。

そもそも、「市場」とは、どういうことを意味する用語であるか？ それは、商品交換または商品売買の行われる場所を指しているものである。商品交換の行われる場所に「経済」という文字をくっつけてもなんの意味ももちえない妄語が生まれるだけである。要するに、この妄語は、商品経済というべきところを、商品という語の響きが資本主義的であり反社会主義的であるので、それを避けるために、つまり、商品、貨幣が流通しているのは——マルクスの厳密な規定にしたがえば——社会主義のひとつかけらもありえないときめつけられる恐れを免れるために、マルクスの理論など逆立ちしても皆目わからない手合いが、考え出した、きわめて悪質

15) レーニン全集、第27巻、303ページ、邦訳338-339ページ、傍点—レーニン。

な妄語なのである。

だが、中国がこの妄語を採用しておおっぴらに使用し、ひろめているのは、それなりの理由というか、またはそれなりの狙いがあるものと考えべきなのである。つまり、「社会主義市場経済」という言葉は、「市場経済」すなわち商品生産・交換をどしどし進めて生産力を高めることによって社会主義経済への推進をはかろうというわけである。「経済特区」にせよ、外国資本の国内への投資奨励にせよ、生産力を高めて『社会主義』——本物の社会主義——にできるだけ早く近づくこと、そのことのためにすべて「社会主義的」という「規定」がつけ加えられなければならないというわけである。だが、これは、冷静かつ客観的に観察するならば、ある種の冒険であり、またとてつもなく大きな賭けでもある、と言わなければならないであろう。生産力を高めるために資本主義を導入し、これを増強することによって、生産力はたとえ十分な高さに達しようとしても、社会主義を築きあげるのは生産力そのものではなくして、人間であり、労働力の担い手である勤労人民大衆である。資本主義の発展は、これら勤労人民大衆にたいしてどのような意識を、そしてどのような思想を吹きこみ、植えつけ、そして強化するであろうか？ 答えは、唯物史観の定式をかえりみずとも、明白である。貨幣奴隷の氾濫——すべての資本主義国の人民の大半がそれに落ちこむことは、すでに歴史が教えているところである。資本主義を発展させることによって資本主義を倒すことをはかる——これは、冒険などというものではない、まさにミイラとりがミイラになる類いである。世界史上はじめて、かのスターリン書記長の発明した「マルクス・レーニン主義」という旗印などどこかにしまいこんで、「商品、貨幣は社会主義にもりっぱにある」という書記長直伝の「理論」をそのまま頂戴して、しかも資本主義を発達させることによって社会主義建設のための物質的基礎をうちかためるといふ、前代未聞の壮挙に取組みつつある中国。この超新型『社会主義』の成否こそは、まさに刮目して待つべきところであろう。

中国国務院の最高顧問であり中国経済学界の大御所である胡喬木氏は、かねてから『スターリン論文』に傾倒して「価値法則の利用」などという典型的錯誤を大々的に宣伝しているが、価値法則とは、商品価格が価値を中心として運動するというこゝで、「利用」などとは問題にならないたわごとである。加えて、彼は、「労働に応じた分配」を強調して中国の「社会主義」ぶりの宣伝につとめているが、いま中国で広く推進されつつある株式制度では、株主にたいする配当なるものをば、どういう労働にたいする報酬として説明するであろうか？ まぎれもない資本主義的利潤の分配を、労働にたいする報酬と説明することは、おシャカさまでも無理というものである。

二) 最新式『社会主義』の模型の一例——N前衛党の綱領に登場したもの——

ここに新型『社会主義』の一例として紹介するのは、わが国のN前衛党が最近発表した党綱領のうちの「われわれのめざす社会主義」と題された一節である。全文を紹介したいところであるが、紙幅の制限を考慮して、その中でとくに問題だと思われる部分を抜粋してかけ、簡単な注記を添えることにしたものである。(とくに問題と思われる個所には下線を施して読者

諸君の注意を促すことにし、なお後段での検討のさいの便宜を考慮して、各引用個所の頭に①、②、……と番号をつけることにしたものである。）

①「われわれのめざす社会主義は、スターリン時代に形成された官僚主義的政治・経済システムとは異なるものとして構想される。」

「官僚主義的政治・経済システム」という、この気取った文字は、まったく手のつけようのない内容空っぽの術学的たわごとで、この言葉ひとつで、この綱領の起草者たちが、スターリンの建設したソ連『社会主義』体制についても、また総じて社会主義社会とはどういうものであるかという基本的知識についても、その一片ももちあわしていないことがよくわかるのである。

②「われわれは、革命に勝利し人民権力を樹立した後、独占資本家階級の生産手段と金融機関を全人民的所有に移し、自衛隊と警察を解体して人民の武装に変え、天皇制を廃絶し官僚機構を解体して人民の政治機構に変える。この革命の勝利によって、日本における社会主義への新しい道が切り開かれる。」

この綱領の起草者たちは、いとも簡単に「革命に勝利し」と述べているが、いったい、革命とはどういうことか、「革命に勝利する」とは、どういう内容のことであるか、まったくわけわからずに、ただ景気よく「勝利し」などと書いている。「革命に勝利し」たところで、やおら「自衛隊と警察を解体して人民の武装」がはじまるというのでは、後先、まるであべこべである。いったい、誰がどうやって、どういう「革命」が、勝利するのか!?! さらに、この起草者たちは、人民という言葉が大好きなようである。ほとんど各パラグラフごとにくりかえしきかんに出てくる。だが、人民は、この国では皇族という族を除けば、一人残らず人民の一員なのである。中小資本家は申すまでもなく、どの大資本家、大地主も、大金持もみな人民の一人である。だから、現在日本にある政治機構も——シンボルとしての天皇制を度外視すれば、——「人民＝国民の政治機構」にほかならないのである。

③「人民権力の樹立後、社会主義を実現する過程においては、

政治の分野では、圧倒的多数者である労働者・農民をはじめとする人民の民主主義が徹底的に遂行される。すべての権力は人民に帰属し、中央と各級の権力は、民主的な普通選挙によって選ばれた労働者・農民をはじめとする人民代表で構成する機関が代表する。」

大資本家も中小資本家も自営業者も一人残らず人民として「民主的な普通選挙」に参加し、この選挙によって選ばれた人民が人民代表となり、めでたく人民権力をうち立てる、という筋書は、今の民主日本で実行されているところと、まさに瓜二つである。

この綱領の起草者は、「人民」という言葉がお好きで連発しているが、この「人民」という言葉は、いまの日本では、「大臣」などと並んで、もっとも悪質な階級的差別用語なのである。

④「経済の分野では、生産手段の社会化を基本として合理的な計画経済と市場経済を結びつけ、企業内での民主的運営を実行し、資本主義のもとでの搾取と生産の無政府性を克服する。

………（中略）………所有制の全面的変革は相当長期の展望のもとに追求され、それまでの間は生産手段の社会化を基本としつつ、生産力の発展段階に照応した多様な生産関係が共存する。非独占資本および農業自営者の社会化・共同化は、条件が熟したのち、自発的意志を尊重して段階的に行われる。」

このパラグラフを一読すれば、この綱領の起草者たちのマルクス主義理論にかんする基本的知識の完全な欠如ばかりでなく、総じて初歩的な経済学的用語についても、はたまた一般的な正常な論理的思考力も、ことごとく欠如していること、それにもかかわらず、一見変革者らしい用語をひけらかすという、まったく手のつけられない、無力な煽動政治屋の類と同じ思考能力と品性との持主であることが、疑う余地なくわかるのである。

まず第一に、「生産手段の社会化」とは、いったい、どういうことか、どこから仕入れたのか、言ってみたまえ。これほど、でたらめの、混乱したたわごとは、二つとあるものではない。社会主義社会では、すべての生産手段が社会的所有に帰することは、まったく初歩的常識である。だが、この場合、生産手段の社会的所有という正常な用語におきかえるならば「所有制の全面的変革は相当長期の展望のもとに追求され」という、気どった文句のノンセンスぶりもたちまち明るみに出てくるし、さらにこの「長期の展望」という文句は、はねかえって、さきにもっともらしく「革命の勝利後」と言明したときの「革命」とはいったい、どんなことを変革したものであったか、という疑いにまでひろがっていくのである。すべての生産手段を社会的所有に移すことが社会主義をめざす革命の第一の基本的任務であり、その主たる内容でもあるということが皆目わけわからず、「相当長期の展望のもとに追求され」とは、まったくあきれかえってものもいえないというところである。

右につづいて、「文化の面では」とか、「対外政策の分野では」とかいう、まるで橋本首相が物言うのと同じくもっともらしい書き出しではじまるパラグラフは、もはや読む骨折りにも値しないであろうことが明白であるので、最後の「聞かせどころ」だけをつぎに引用して見ることにしよう。

⑤「労働者階級は、革命によって樹立される人民権力に依拠し、人民の大多数の意志にしたがい、プロレタリア階級の指導性を強化しつつ社会主義へと前進する。この過渡期全体を通じて権力の持つ階級的な本質はプロレタリアートの独裁である。」

賢明な読者諸君、あらんかぎりの知恵をふりしぼって綴り合せたこれらのメイ文句の数々を、どうかとくと賞味していただきたい。

まず、②で「革命の勝利後」という画期的なせりふではじまるが、いったい、どういう革命なのか、だれがだれにたいして、どのようにしたのかという肝心の中味はまったくわけわからず、ただ景気のいい「革命の勝利」という言葉だけが大きくかけられる。と、いつのまにか③で「人民権力」が出てきて、やおら「民主的な普通選挙」が行われ、旧資本家も地主も金持も貧乏人も、今とまったく同じように人民として投票することになる。それできるのはただ

の「人民代表」で、これがどんなもので、なにをするのかはわからないが、これでめでたく「人民権力」が出来て、④で、「生産手段の社会化」と「市場経済」とやらを実現してくれる。この「人民権力」は、⑤では、「人民大多数」の意志にしたがい、「プロレタリア階級の指導権」もこれに従っているが、いつのまにか「人民権力」は「プロレタリアートの独裁」に取り替えられ、この「独裁」がおしまいに社会主義建設の主役になり変ってしまう。が、しかし肝心の社会主義についての説明はこれでおしまい、幕となる、という始末である。

「革命の勝利後」、「民主的な普通選挙」、「生産手段の社会化」、「市場経済」、「プロレタリアートの独裁」、——この五つの言葉が並べられているのを見ただけで、この綱領の作者たちが、肝心のマルクスやレーニンの重要な著作はろくに眼も通さず、読んでも全然わけわからず、間違った、でたらめの解釈をおしつけて得意になっているものだということは、誰にでもわかるが、なお心ある読者は、右の五つの言葉の裏に「赤いジュータンの上での政権交替で社会主義が出来上る」といったまやかしを唱えている日和見主義党にたいする反発と憤激とが秘められていることを感じとってそぞろ憐憫れんびんの情を覚えると同時に、つぎの諺がおのずと口の端にのぼってくるのを禁じえないのである、——「The road to hell is paved with good intentions. 地獄への道は、善意をもって敷きつめられている。」

(April 9, 1998. In memory of eighty-five winters.)